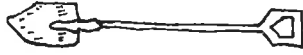


米水津村の出稼 (5の2)

—— 炭坑・土木・その他 ——



市野瀬 仁

(会員 佐伯市長島町)

青函トンネルの想い出

三股 清一郎

昭和二十九年、津軽海峡を襲った台風によって、青函連絡船の洞爺丸が沈没し、千有余名の尊い命が奪われたあの惨劇が発端となつて計画された青函トンネルですが当初は、調査工事として北海道から着手したのでした。

入口は、いきなり四分の一勾配の斜坑でした。口で四分の一勾配の傾斜といいますが、掘る方としては苦勞と危険が想像され、これは大変だなと心で思い取組んだのでした。

頭の上に常にある海水の怖さも念頭から離れずに、これは最後までつづきました。

その水は、斜坑ですからいつも

切羽面の際に溜り、水中ポンプを使用し、五十メートルごとに掘った横坑の溜枘に汲み上げて、その排水ポンプで次々に送り上げて外まで排水したのです。

発破で砕かれた岩石は、坑外に設置された巻上機を使用して、八立方メートル積めるスキップカーで坑外まで排土したのですが、下で作業する私達は、そのスキップカーが、いつか暴走してくるのではないかと不安と恐怖があつたのです。

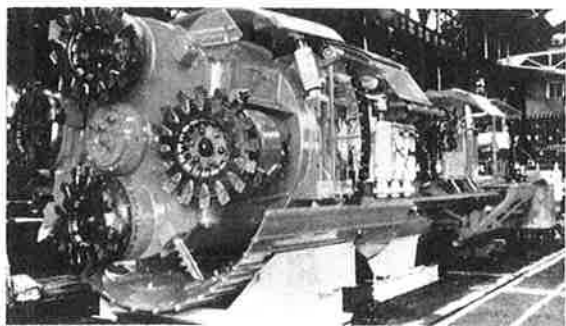
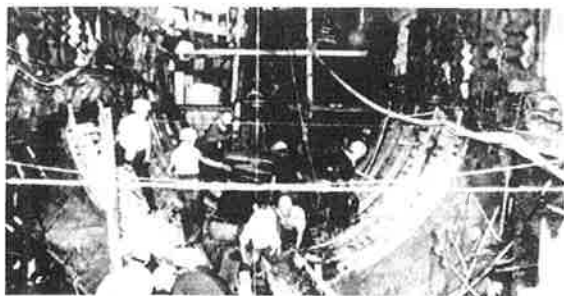
でも、斜坑長千二百メートルの斜坑工事が完了するまで、そのようなことは危惧に終りました。

斜坑工事の途中から、本州方からも同じく着手することが決まり、人員を半分分割して、片方は竜飛岬へと別れて行ったのでした。

北海道方は、斜坑底に海底工場ともいえる基地づくりに挑み、いよいよ水平坑（後に先進導坑）の掘削を開始し、斜坑六百メートルの位置から横にもう一本、作業坑というトンネルにも着手したのです。

この作業坑は、あとで着工するであろう本坑のために利用されるトンネルといった方がいいでしょう。

本坑は、五十六キロメートル余もある長いトンネルで



すから、一ヶ所から掘り進んでいたのでは、いつ掘り終るか分からないほど年数がかかるので、そこで作業坑を本坑と平行して、更に先進させることによって、途中からでも本坑が掘れるようにするためです。それと、本坑に必要な資材や排土も、同時に出来る一石二鳥の利用度を考えたトンネルです。



写真説明

- 上 先進導坑の作業風景
- 中 ボーリング・マシーン
(スイス製)
- 下 作業中の三股氏(左側)

いいわずれましたが、本坑とは、最終的に列車が走る本トンネルのことです。大きさは高さが九メートル

幅が十一メートルの広軌道用複線断面です。新幹線がすれ違い出来るのです。ですから青函トンネルは三本のトンネルをもって作られているということです。これは、本州方も同じ様式で進められました。

最初の湧水によるトラブルは、別れた本州方の斜坑で発生し、その経験が後にすばらしい工法の開発につながったのでした。その工法とは、LW注入と云って、珪酸ソーダとセメントミルクを、別々の高圧ポンプによって送入する方法です。これで岩の亀裂に入れて湧水路を閉ざしたり、軟弱な砂地層を固めたり、地盤改良に大きな成果を挙げたのです。だが、こういうことは、すぐに成果を挙げられるのではなく、幾度となく方法に改良を加えて出来上がったのです。

海底基地が出来上ると、水平坑の掘削です。この掘削には、スイスから導入したトンネルボーリングマシンが採用されました。尺取虫型の自重七十トンもある大きなマシンでした。硬い岩盤には向いていたのですが、軟弱層になると自重があるため本体が埋り込み、前進出来ずこの図体の大きい奴の介抱に手を焼いて断念したのです。それからは従来の発破工法にして、最後まで掘削をつづけたのでした。

また、両方で数度の大湧水があったのですが、中でも北海道方の作業坑で発生したものは、毎分八十トン以上計測出来ないという想像を絶するものでした。至上命令

では、私達の掘っている先進導坑に水を入れるな、ということで、作業坑とつながっている小さい横坑・立坑（これは通気用坑でごく小さい）を密閉するのに使用したセメント袋数は、何万袋ともいわれました。そして、その受け皿として本坑の完成部が湧水を一手に引き受け、その間に必死の排水作業を行い、やっとくいと止めたのです。津軽海峡の無尽蔵の海水のことは、誰れ一人として常に頭から離れることなどないのですが、自然の力の怖さを痛感しました。

LW注入では、各トンネルが自体の三倍の範囲に注入を行い、亀裂等の密閉をしているのですが、予想出来なことが起るものです。幸い怪我人もなく止水出来たことは無上の喜びと云うことだったのでしよう。

このように、幾多の出来事に遭遇しながら完成されたトンネルですが、使用された機械類も多種多様で、膨大な数でした。それだけに機械類による事故も多く発生し尊い生命が危険にさらされたり、奪われたりもしました。危険は常にまとわりついているのですが、生命までとなると、無念としかいようがありません。青函では、三十有余名が殉職されました。その他に病魔に侵され他界

された方々を含め、数多くの人達が亡くなっており、改めてご冥福を祈らずにはおられません。

世界最長の海底トンネル工事に、その一員として関与出来、何ごともなく元気に現在に至っている私ですが、その私の喜びは、まったく掘り進む行手が未知な先進導坑を、仲間と手を携えて貫通まで漕ぎ着けたことです。友を失った悲しみや、一步も前へ進むことの出来なかつた風化現象の地質地区等、思えばよくやったと思ひ、貫通式での首相の押す発破ボタン回路のスイッチ投入後、仁杉公団総裁が、私の氏名を告げたあの声は、今でも私の耳底に感激を呼び起すほどに残っております。

青函トンネルの想い出として寄稿いたしますが、私が当米水津村の出身者であったことを喜び、誇りにも感じ村政百周年を祝いたいと思います。

村政百周年を記念し、村誌発刊にご尽力下さっている方々に敬意を表すと共に、米水津村万歳を唱じます。

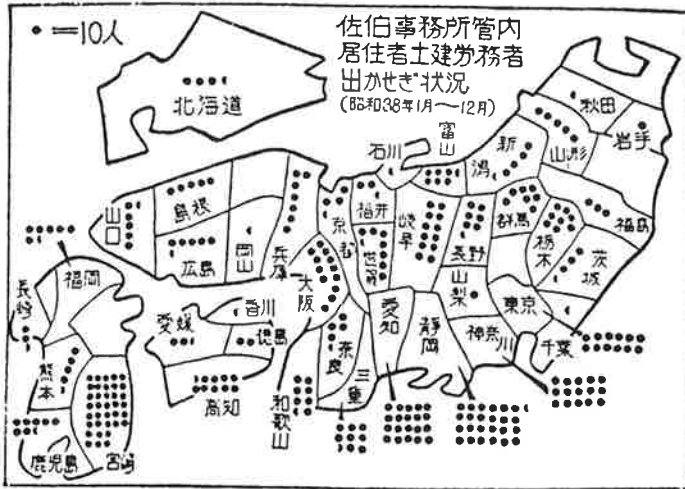
昭和六十一年九月十五日

全国土建出稼者

建分布図の分析

別表「佐伯事務所管内居住者土建分布図の分析 建労働者出かせぎ状況」(昭和三十一年一月から十二月まで)を見てみよう。

昭和三十八年という年は、東京オリンピックのあった



「大分合同新聞」昭和四十一年一月二十八日より(再掲)

一年前の事で、ある。日本経済高度成長期、それにしても

佐伯管内からの全国に働く土木業者の数およそ二千七百四十名。その中、宮崎県に三百六十名と全国一位となっている。

それは、一に、一ツ瀬川水系のダムの建設が大きい。

杉安ダム三十八年三月完成。一ツ瀬ダム三十八年六月に完成の記録が立証している。数の多いことから豊後土工面目躍如という表現が適切であるかどうか疑わしいが、その勢はすさまじい。それに反して九州各県への出稼数が比較的に少ないのは、それだけ仕事がないのか、佐伯周辺が西九州より関西方面への指向型という性格があるのではないか。又一面、東京周辺を中心とする中央集権への求心力がある点も考えられよう。

酒屋

奉公

現在、佐伯市・南海部郡に造酒屋は五軒ある。明治・大正・昭和初期頃までは、各町村に一軒位はあった。「上浦町生活史」によれば、昭和四年、佐伯町・南海部郡二十四ヶ町村に十九軒あったとある。

酒造は杜氏とらじといって専門の技術者を必要とした。これ等の人は、冬季出稼人で、へおやじVとよばれる人の中

心に郷党的集団を形成していた。広島・岡山・兵庫・新潟・岩手県等の杜氏は全国で有名である。（現代新百科事典一学研）

米水津村から宮崎県の酒造屋へ出稼に行った人々は杜氏の手伝をする、いわゆる酒屋奉公であり、手子であった。波が荒く、漁業のむつかしい頃、十一月から十二月あるいは三月末までの間であった。

大正年間、色利浦・大内浦・竹野浦から宮崎県の土土呂へ十名以上が季節出稼者として行った。宮野浦の松本賢蔵の祖父嘉蔵（八十歳）は、現在土土呂に住んでいる。彼は細島から十三里山奥の「山影」の酒造屋で四十年間働いた。彼はひとかどの杜氏となり、米水津村から彼を頼りに何人か行ったに違いない。昔は何によらず誰かが先鞭をつけて、それをつてに出稼の数が増していたものである。酒に関連した話で「上浦町生活史」の中に次のような記事がある。

津井地区において、明治二十三年、天神社が炎上したが、財政が悪かったため、社殿建設もしばらく仮殿で過ごした。明治二十八年頃になり、社殿建設の議が起ったが、なかなか思うにまかせなかった。その時の建設委員

の一本田発五郎氏が、米水津村浦代の行商人から次の様な話を聞き、それがヒントになったようだ。つまり、若者が他領に出稼ぎするときは、必ず酒を造る家に行き、帰村の時に大きな竹筒に酒を入れ、土産として持ち帰ることが例となり、その持ち帰りの酒のいくらかを運上させ、その金を積み立て中用に使ったという。発五郎はこれを聞き、中用金調達法の仕方として良い方法と知り、当時、津井学校の教師だった隣家、本田十郎氏と相談して、消防組にて酒屋経営は有利と判断し、精密に研究した。とある。

多くの職種を経験した 明治・大正生れの人

今まで、反物行商から紡績工・木材・炭坑・土木・酒屋奉公等、全国にわたって出稼問題を述べてきた。出稼は口減しのため、一家の経済的援助のため、あるいは己の経済的独立のため、新しい情報を敏感にとらえて、あるつてを頼りに、幾種類の職種をかえて生きて来た明治・大正生れの人は多い。

その中の一人、色利浦出身富松彦一（八十歳）を紹介

して、明治生れの人の生き方をみつけることにしたい。十六歳で川原木・重岡間の日豊本線鉄道敷設工事に従事し津久見セメントのバラス背負い②大野郡緒方で豊肥線敷設工事④山口県岩国の道路工事⑤長野県水力発電工事⑥十九歳のとき木曾森林鉄道工事⑥延岡で酒屋奉公（二十歳）―反物行商―昭和十四年、左の現在地に定着―戦争に参加。

現在地―鹿児島県肝付郡串良町岡崎。彼のように鹿児島に行商で定着した米水津出身者が十数人いることや、二男・三男が独立した呉服屋を持ちたくて働いた話は、反物行商（②）のところで、既に述べたとおりである。

年表より出稼及び 硅肺病発生をみる

一、明治から昭和初期の間は綿紡績及び化学繊維の生産と、反物行商・紡績女工の

出稼との関係に注目したい。

二、明治三十五年から第一次世界大戦の大正初年にかけて海運業の動向が活況を呈してくる。

三、日清・日露・満洲事変・日中戦争は石炭資源の需用を大きく必要とした。

四、大正初期からの鉄道敷設、昭和初期の佐伯海軍航空隊開隊、戦後のダム建設、道路網拡大、海底トンネル敷設、新幹線の敷設、港湾の埋立及び改善等による土木業の活況。

五、近代化学工業の隆盛と海水汚濁により、人間及び魚類の奇病発生。

六、日本列島改造による自然環境破壊、公害問題の深刻化。

七、テレビをはじめ情報社会となり、生活の変化により核家族及び出生人口の減少等を読み取ることができる。

山林・炭坑・土木出稼 及び硅肺病調査の分析

前号掲載の表「山林・

炭坑・土木の出稼及び硅

肺病」との調査は、聞き

とりによるため、正確な数字はつかみ得ない。第一、明治時代がわかりにくい。大正・昭和時代に於ても、もれたものがあり、実数はかなり上回るとみてよい。

一、山林関係では、色利浦が全村の六十%を占めている。

二、炭坑では、浦代が六十%を占めていて、硅肺病が多

三、土木・炭坑では、人口に比して竹野浦が多い。特に三十戸の小部落の田鶴音の数は異常で、硅肺病・事故の多数が注目される。

四、年表にみる各時代の経済危機の現象は、この数字をよく反映している。例えば、大正期は明治期の四倍、昭和初期は大正期の二倍、戦後は戦前の二倍強となっている。

五、事故死の外に不具者も半数近くあることは、色利浦の例からみても推定できる。

六、宮野浦及び小浦の数字が少ないのは、漁業にその理由がある。宮野浦は昔から漁業専門の地区であり、小浦は半農半漁としてなりたつ地区である。

この表に、反物行商・紡績を加えると大変な出稼者数となっているはずである。このような出稼者が多くあるのはどんな理由によるものだろうか。それは当然のことながら、物資が不足して貧しかったからだ。日本全体が貧しかったのだ。何故か。それは人口が多く、そして、非生産的な軍隊があり、働き盛りの男性が軍事に関与していたからである。軍事費が民衆に対して多額な税金を負担させていたからでもある。

私達は子供達に衣食住をはじめ物資に不自由のない生活、テレビ・電話・車の便利な今の世の中を見つめさせ祖父・祖母の時代の出稼の実態を読ませ、語りつぐ義務があると思う。そして、家庭ではお互いどうしたらら心

親睦と活性化を図って

今年の旅行計画のお知らせ

新年度の事業計画の中で、定期的な研修旅行の実施が提案されました。



旅行の内容は、各地方の歴史を探訪しながら、会員相互の親睦を深め、さらに会員の増強と若返りによって、会運営の活性化を図ろうというものです。

次にその計画案を載せますが、この案は決定したものではありません。会員の皆様方のご要望に応えながら、その都度変更し、柔軟に対応します。

なお、具体的なスケジュール等は、経験豊かな軸丸勇委員さんに尽力いただいております。どうぞ、安心してご家族・ご友人（会員に限りません）をお誘い合わせの上、ご参加下さるようお願い申し上げます。

佐伯史談会事務局 さとうたくみ

◎ 一年間の旅行計画案

- | | | | |
|----|---------------|--|---|
| 5月 | (実施) 「童話の里」 |  | |
| 6月 | 信仰と史跡の旅 四国めぐり | | |
| 7月 | 浜木綿の咲き乱れる県南海岸 | | |
| 8月 | 山鹿灯籠祭り | | |
| | 9月 | ぶどう狩りとワインの安心院
「神楽の里」 高千穂 |  |
| | 10月 | 紅葉の耶馬溪を訪ねて | |
| | 11月 | 天草のキリシタン史跡 | |

身共に健康であり、今からこの村をどうしたらよいか、真剣に話し合う機会を持つべきではないだろうか。それは母の日・敬老の日・勤労感謝の日でもよい。